

(株)アオキ マネージャー
小林 千里

今回は株式会社アオキの小林さんに登場して頂き、衛星通信との関わりについてご紹介したいと思います。お忙しいなかでのお願いと言うことで、インタビュー形式をとらせて頂きました。

> 本日はお忙しいところ、お時間を頂きありがとうございます。我々にとって(株)アオキさんは、「まいど衛星」のプロモーターとして、民間初の人工衛星打上げと、まさにこの不況の時代にとても元気の出る話しを提案して頂いているわけですが、はじめに、「(株)アオキ」について簡単にご紹介頂ければと思います。

小林 - (株)アオキは、1961年に先代が創業した青木鉄工所を継いで、1995年に青木豊彦が設立しました。創業時は農機具を扱っていましたが、持ち前のチャレンジ精神を発揮してロボットなど新分野に業務を拡大してきました。青木の「モノづくりにはプライドを持たなあかん」という思いは、従業員数25名の会社を、世界最大の航空機メーカーであるボーイング社の認定工場に押し上げました。

> ありがとうございます。ところで、(株)アオキはいまや「まいど衛星」のプロモーターとして全国の注目を集めて居るわけですが、なぜ、この衛星プロジェクトをやると思ったのでしょうか。



最近の小林さん

小林 - 仕掛け人は、東大阪商工会議所の成瀬常務理事です。ピーク時には12,000社ほどあった東大阪の企業も、この不況でその数は8,000社を切るまでに激減しています。「ロケットもつくれる」とまで言われたこの町も、その技術の継承者不足に悩んでいます。そんな中、「おもしろいおっちゃんがおるで」と聞いて訪ねてこられた成瀬常務が、「東大阪をパアッと明るくする花火師になってえや」と青木に持ちかけたのが事の始まりなんです。そこで、「よっしゃ、ほんなら何

かでっかいもんやろか。そのロケットを実現しようやないか」となったわけですが、大阪府立大学の東教授に「ロケットは難しいが小型の人工衛星ならできるのでは」とのアドバイスを受けて、このプロジェクトがスタートしました。

それともう一つ。このお話と同時に、青木がいつも考えていることも背景にあるのではないのでしょうか。

> それはどんなことですか。よろしければお話ししてもらえませんか。

小林 - 青木の考えていることはいつもの口癖に現れていると思います。ポイントは次の3点でしょうか。

(1) 企業の命は30年

今はドッグイヤーと言うて、なんでも猛スピードで進んでいる。しかし、30年の中で出来ることはそんなにない。 $30 \div 7 = 4.5$ でしかない。この4回のチャンスを活かさんと「どないすんねん！」

(2) 最近の若者

いまどきの若いもんは元気がない。人は夢食べて生きてるんや。若者も、関心がないんやのうて、燃えるものが見つからんから元気がないとちゃうか。

(3) 中小企業に勇気が足りん

桃太郎は鬼退治にサル、キジ、犬を連れていった。これは、「知恵」、「情報」、「技術」だと言われている。で、今会社の連中はどれも足らんことは無い。皆、人の出方を見ているだけや。(政治も一緒。) もっと勇気を出して打って出なあかん！



会社の一室で



衛星モックアップ

> 確かに、今大事なものは景気対策のなかでも、元気が出るような運動、取組みのような気がしますね。議論ばかりで、何も取組みが無いような気がしますね。

ところで、小林さん自身はどうしてアオキに入ることになったんですか。衛星をやって見たかったんでしょうか。

小林 - 自分が生まれ育った町でそんな夢のあるプロジェクトが生まれつつあるのを知って、航空宇宙工学を少しかじった私に何かお手伝いできることがあるなら、と思いました。青木と会ってその気持ちを話したところ、ことのほか喜ばれて、ボランティアでは申し訳ないから、とアオキ社員にして頂きました。

> そのお話しは、青木社長からもお伺いしましたが、条件付だったと。

小林 - そうです。私は卒業したらすぐスイスに移住して、友人たちと一緒に牧場を経営することになっていました。青木と初めて話したときに「3年だけ手伝って、打上がったらスイスに行きたい」と話しました。予想していた答えは2通りでした。「それやったらもうええわ」と断られるか、「それでもええから手伝って」か。答えはどちらでもなく、「よっしゃ、そのときはヨーロッパ支社長や！」と。それで決まりでした。本腰を入れて仕事ができるわけですから。

> やはり時間は3年ですか。

小林 - はい。スイスにいる友人たちや友人の子供たちに3年したら帰ってくると約束しました。青木が言う「ヨーロッパ支社長や！」を実現したいと思います。

> 長時間お付き合い頂きありがとうございます。最後になりましたが、衛星プロジェクト、あるいは衛星そのものへの小林さんの想いを教えて頂きたいと思います。

小林 - このプロジェクトの目標は、人工衛星をつくることだけではなく、職人・学生そして宇宙開発の専門家がいっしょに衛星をつくるということを通して、モノづくりの匠と宇宙のノウハウを学生に伝え、次の世代へと継承していくくみを作り出すことです。そして、宇宙産業という世界でビジネスを成立させることで、青木がいつも言う「実証を示す」ということが究極の目標です。

「夢を語る」のと「ホラを吹く」のは紙一重です。とんでもないことを言い出すところまでは同じ。あとはその実現に向かって堅実な努力をするかしないか、だと思います。

> 勇気の出るお話しありがとうございます。本当に、今、元気が必要で、この「まいど衛星」が起爆剤になれば良いですね。

それでは、プロジェクトの発展と成功をお祈り申し上げ、インタビューを終わらせて頂きます。ありがとうございました。



衛星モデルを前に青木社長と

本インタビューは平成15年1月21日に行われました。
(編集委員 水野 秀樹)